

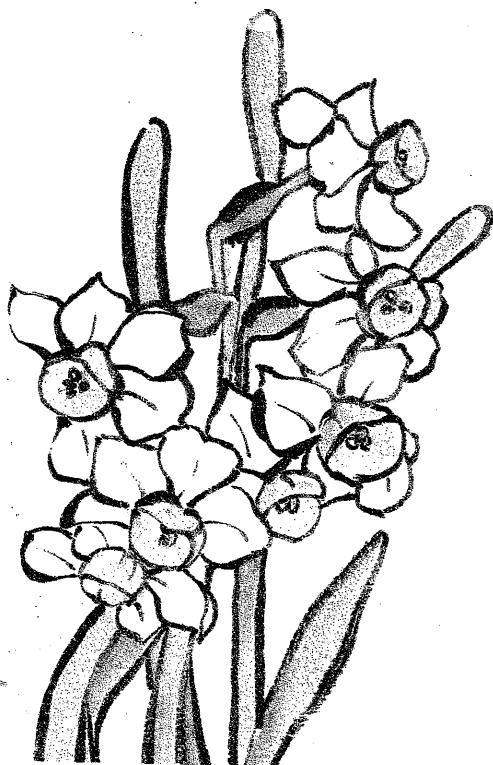
オリーブの樹

第137号

2017年2月12日

شجرة الزيتون

早期积放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



獄窓に
下弦の月を捜そう
夢の続きの
友思わさるる

目次

- P 2 冬の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 14 トランプ政権とパレスチナ 重信房子

重信房子さんを支える会

冬の歌

重信 房子

もう二度と会えぬと知りつひとことを言えず別れし旧友は旅立つ
 マフラーに顔を埋めつ自転車で図書館通いの友浮かぶ
 満月と共に歩みし高原の冬の夜道に薄氷響く
 ガーベラの細き首先少しずつ俯きはじむ冬の独房
 寒風に向かいつ小遣い握りしめ胸踊らせたボロ布の日は
 入植は違法直ちにやめるべし安保理決議やつと採択
 数多なる逝きし命を胸に刻み初日の出祈る獄窓寒し
 朝焼けに染まる廊下を音もなく巡回が行く起床時近し
 ピラカンサ低き梢に残された赤い実狙ってひよどりが舞う



独居より 11月15日~1月31日

新聞を開ければ今日もトランプの人々騒がす大統領令

重信 房子

11月15日 今日のコーラスは「里の秋」。ソプラノの先生は昭和20年のこの歌の背景、戦争に負けて外国から引き揚げてくる父を待つ歌詞を説明しながら、84才の自分が死んでもみなさん戦争反対だけは忘れず訴えて！と語っておられました。それと「少年時代」と「花は咲く」あつという間の一時間でした。

資料感謝。パレスチナのビルトイン村の記事があります。「壁」建設に抗議する恒例のビルトイン村の金曜行動中、リーダーのアハマド・アブラハマと支援のイスラエル人ミハ・ラハマンが捕まったとのこと。パレスチナ人、イスラエル人、ブラジル人、ベルギー人らのグループが参加して「バルフォア宣言」非難スローガンを掲げています。日本からもオリーブ収穫の援農で行っていたところ。オリーブ収穫中の農民が襲撃されたりしているとのこと。二国家解決を否定し「ユダヤ化」の動きはエルサレムから更に広がっているようです。

トランプ大統領は、カジノ王でネタニヤフのスポンサーで盟友のアデルソンが支援してきました。エルサレムに米大使館を移転するし、BDS運動つぶしを狙ってくるでしょう。銃社会、弱者軽視、人種主義がはびこっている米社会・世界に「自国第一主義」「利己主義」の思想が更に広がりそう。

しかし、またその流れに抗して人民主義に基づく民主主義が広がるはず。パレスチナからBDS運動を通して、反占領の闘いから国際連帯を牽引する力が育ってほしい。米国の「変化」は人民運動の連帯で「世界同時かくめい変革の時代」に入っています！

四方田先生のお便り、ベイルート生まれのジョスリーン・サアブさんのドキュメンタリーを日本で上映されるとのこと、期待しています。先生は黄熱病や髄膜炎の予防接種を受けているところだそうです。

す。ブルキナファソで開かれる全アフリカ映画祭に参加するためです。日本人初参加のフィールドワークは地球大ですが……、体調管理して成功を！

11月16日 駆けつけ警護閣議決定の記事。とにかく米国に呼応してあれこれ既成事実をつくりあげたい首相。非現実的想定のまま自衛隊は不安定要素を抱えて着々戦争へ。官邸前には昨日朝から内閣決定抗議の人々。こういう声がなかったら一気に戦場へと送る安倍政権です。

窓の外でははらはらと落ちる紅葉を懲役の男性たちが掃いています。もう冬。落ち葉もまっさかりの八王子です。

11月18日 今日は、白い小さな野菊のような菊と、ピンク・赤グラデーションのカーネーションスプレーの花が届きました。花はほっとします。ほんの少しの香りがして深呼吸して楽しんでいます。

新聞では毎日トランプの記事。宗旨変えしたように安倍のトランプ訪問。まだ公職に就いていないのに一番乗り。決してプラスにならないでしょうけれど。

大喜びなのはネタニヤフです。「イスラエル国家の真の友。この地域の発展、安定と発展の共通の利益、共通の運命に基づいている。トランプ氏と私は、イスラエルと米の特別な同盟関係を強め、一層高めると確信している」と、祝メッセージを送ったとか。「入植地は和平の障害にならない」し、「イスラエルの首都として統一エルサレムを承認し、米大使館をテルアビブからエルサレムに移転する」というトランプ。二国家併存方式は棚上げし、ネタニヤフを称賛してフリーハンドを与えるでしょう。

トランプの、米国らとイランとの「合意」の破壊が今後の中東政策のメルクマールになりそうです。

11月25日 寒い！もう最高10度最低マイナス2度の八王子です。さすがに今日は朝スチームが入りました！暖かい！でも短い時間でけれど。外は銀世界。昨日城崎さんの公判があり、第一審の判決日だったのでラジオに耳を澄ましたのですが、ニュースはありませんでした。……これは良くない判決結果だったのか……とがっかりしていました。新聞が届いて一番に記事を探しました。やっぱり……。検察の論告をそのまま付度したような判決。12年もの長期の重刑。裁判員の一人は「30年前の事件で、これという決め手がないので、判断する難しさがあつた」と述べているように、証拠もあいまいで、結局裁判長らプロの判断が誘導したことが覗えます。プロは検察の論告を公安事件は踏襲しています。厳しい米国の一方的な拘束に続いて、一事不再理の原則も無視されて更に12年の懲役刑……。憤りと共に様々な意味で責任を感じつつ何もできないことが無念です。「オリーブの樹」は発行されたと思いますが届かない……。

11月26日 カストロ死す。90才。革命家から建国を経てキューバ人民を統率し続けた人。革命家が建国を経て変わらず進む困難さを体現した人だった。ラテンアメリカの武装闘争から権力を握った指導者たちにとってお手本でもありました。パレスチナの人々、ことにPFLPは清廉なカストロの決して銅像をつくらせないことから始まって、アラブのパレスチナのプチブル指導者の欲にはうんざりして比較していたのを思い出します。合掌。



12月1日 朝、雨だったのに午後は快晴。おかげでグラウンド運動は中止のまま。午前中主治医の診察があり血液検査の結果、腫瘍マーカー数値は正常範囲内とのことで一安心。でも大腸の狭窄状態を解決するために12月15日に「内視鏡的狭窄拡張術」を行うことになりました。縫ったところの断端がふくれあがり（肉芽というそうです）そのため狭くなっており、内視鏡手術で肉芽に切り込みを入れて広げる手術とのこと。広がらないなら第二段として内視鏡の先からバルーンを膨らませて切り込みを更に押しつけて広げる手術とのこと。リスクは出血や穿孔などとのことです。説明を受けて諒解し、書面に署名指印しました。また10日すぎから腸内洗浄のための準備です。

「オリーブの樹」は表紙のアラビア語（これまで問題なかったもの）の題字が不可で遅れたとのことで、午後その箇所（題字だけですが）末梢に同意し今後受け取れることになりました。また泉水さんへの手紙になるような文面もあつたようで、そういうのは不可とのことで丁度書いたりしていたところを消去したりバタバタしています。文章作業しているものに係れる時間がなかなか取れず進みません。

また、12月10日すぎから20日位まで医療重視のため時間がとれるか……と気にしつつもう残り少なくなった1カ月のラストパートの実務の数々です。机の前に座って書ける時間が限られているために本末転倒の思い。「医療第一に」と反省！

夕方「オリーブの樹」136号入手！表紙題字抹消なしで交付されました！これから読みます。なつかしいからす瓜の真赤な色彩が表紙から伝わってきます。「オリーブの樹」作成のみなさんありがとうございます。もうすぐ土曜会忘年会、よい忘年会を！

12月5日 スチームが全く入らない。快晴だけど寒いのに！15日の内視鏡手術の事を、今日いくつか質問し、少しわかりました。

11・25～12・3 国際 BDS 週間に応える形で日本も「パレスチナの平和を考える会」が呼び掛けて、JETRO などに抗議行動が 11・30 に行われたのです。

ね。占領地での入植地で作られたワインの試飲会も中止させ、ヨドバシカメラに対する抗議行動も！資料読んでみます。世界各地の地道な BDS 運動が、今ではネタニヤフの頭痛の種だし。日本での闘いはうれしいです。今の世の中の「生きづらい不安のますます広がる世の中に、自分の周りだけでも暖かくありたい」との思い、そうした願いとアクションが少しずつ変化を育てることを願っていますね。

人民新聞では、ボブ・ディランがユダヤ防衛同盟（アラブ人をガス室で殺せ）と主張したメイル・カハネが創設）支持のことや、「ネイバーフッド・ブリー」（近所の暴れん坊）の歌が、イスラエルのレバノン侵略1年後に出された、イスラエルをアラブ暴力の被害者という、イスラエルの説話を繰り返したものと告発しています。「そう、近所の暴れん坊と言われるけど、彼はたった一人だ。敵たちは彼が自分たちの土地に乗り込んできたと言うけれど、数は百万対一で敵の方が多。彼には逃げる場所も行動する場所もない」「彼には語るべき味方が居ない。得た者にはちゃんと金を払わなければならない。慈悲でもらっているのではない。時代遅れの武器を買い、しかもただでよいとは言ってもらえない」♪ というような歌詞とのこと。全然正しくないけど。こんな歌ははじめて知ったけど。パレスチナ・アラブではボブ・ディランは「シオニスト」として嫌われていましたね。BDS運動から「イスラエル公演を止めて」という要請も拒否。ノーベル文学賞もふさわしくないけれど、気取った振る舞いが何か卑しい気がする。大隅教授みたいに喜んで、それを基礎研究に！という方が断然良いです。発言から、益川教授のように反戦主義者でしょうし。

12月7日 Iさんからの資料が交付されて、日本のBDS運動の勝利を実感。一歩ですが大きな成果です。

「パレスチナの平和を考える会」の11・30報告では、イスラエル入植地の「ワインセミナー試飲会・於ジェットロ大阪本部」にジェットロとジェットロの管轄官庁である近畿経済産業局に、11・28ファックスで場所提供しないよう要請。ジェットロに対し「国連人

権理事会決議」を示してアドバイス。その結果、中止が確認されています。ひとつひとつの闘いの重要性が日本で積み重ねられています。

福島みずほさんの主意書、11・24付「イスラエルとの経済・技術交流と同国とパレスチナ占領政策に関する質問主意書」政府は年内にもイスラエルと投資協定を締結する方針と報じられ、また、サイバーセキュリティに関する技術協力覚書の年内締結の動きも報じられているが、イスラエルがパレスチナ領で継続している入植地拡大は、中東和平に対する深刻な障害である」という点を述べています。

そのうえで、第一、東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区、ガザ地区及びゴラン高原は、投資協定や技術協力覚書の対象となりうるイスラエルの領域に含まれるか？ 第二にイスラエル入植地の住民や、同入植地に活動拠点を持つ企業は、投資協定の投資主体となり得るか？ 第三に、イスラエル入植地に存する企業や不動産等は、投資協定の投資対象となり得るか？ 第四に、国連人権理事会の調査団が、2013年に公表した東エルサレムを含む被占領地の報告で列挙された入植地ビジネス企業は対象か？ 第五に、2014年3月に国連人権理事会が採択した決議を、施策に反映させる必要があると考えるか？ 第六に、宮城県にある「制御システムセキュリティセンター」で、イスラエル製品やソフトの試験を行う計画とあるが、イスラエルのサイバー部隊は、被占領パレスチナ領や、国外の非合法的な防諜破壊活動が指摘されている。日本の資本・技術が利用されないよう、どのような対策を取っているのか？ を質問しています。まったく鋭いポイントです。その後の国からの説明はどうなるのでしょうか。一つずつ追求することが監視と力になります。この主意書はぜひ翻訳してPFLPの機関誌アル・ハダフに送りたい！日本のBDS運動と共に！アラブの人々に、アラビア語で載せてもらったら、とても勇気づけられると思いますから。

12月8日 快晴のグラウンドに出ました。青空に雲はなく気持ちよくウォーキング。もう桜の木は一本を残して丸裸。楓が燃える赤に色づいてみど

となものです。房に戻っても汗が引きませんでした。

午後処遇首席から告知のための面接。で、資料として差し入れてもらった「アラブゲリラと世界赤軍」は矯正処遇上ふさわしくない本として不許可になったとの決定を知らされました。作業上必要で親族にアマゾンで購入してもらったものです。当時850円位が2000円位とか。ところが内容が再び犯罪を犯すと懸念されるという基準の本になってしまったのでした！公判中も読んで「日本赤軍私史」作業にも使っていたのでびっくりしました。その旨告げると未決と既決の処遇など伝えられたので、「革命の季節」などもここで書いたのですが……と伝えたり。不服は所長へ申し立てできるが判断が変わらないだろうし、不服申し立ては矯正管区関東地区長へできること、その結果に不満な場合法務大臣への申し立てなども説明されました。執筆中の資料として差し入れた事情も話し（もちろん首席も承知している）部分的にコピーして再差入れは出来るとのこと。申し立てを正式にしても作業上はいつになるかわからないし……。再考しますと伝えました。いったん宅下げして部分をコピーして入れ直してもらおうことにするしかないか……と考えています。

ニュースでは安倍首相真珠湾慰霊の旅へ。本当にアジア無視の人。アジア人への慰霊の旅がまずあるべきでしょう。日米関係しか見えてないでトランプにとってもオバマの時代に終わらしておいた方が良くと判断したのでしょうか。反中国の構想を描いているのがミエミエですが、日本の将来が不安になります。



12月15日 起床の7時半より前の7時から、今日は腸の洗浄です。窓の外は霜で真っ白。雪が少し降ったような景色です。7時から10時までの間にムーベン3リットルを飲み、10時半に手術室へ。器材チェックや私の太股に貼る電極を取り付けたり準備。外科手術の時も貼りました。電気メスを使うためです。11時から11時半までの手術。メスで狭窄部分4か所（時計の12時、3時、6時、9時の位置）を開きました。その後、バルーンをその位置にふくらませて1分くらい停止させて、更に広げました。この電気メスはあまり痛くないけれど、バルーンで腸を広げる時が苦しかった。でもすぐに終わって、もう一度狭窄部分の広がり具合をチェックした上で、2回目のバルーン。バルーンで1.8センチに広がること。これまで0.7~1.3位の楕円状の狭窄部分は、カメラが通る大きさになりました。（カメラ1.36センチ）「大丈夫ですか？大丈夫ならこのまま前回入れなかった腸の奥を検査しましょう」と主治医。「大丈夫です」と、チェックしてもらいました。直腸のところのSMT（粘膜下腫瘍）以外は新しいホリープはなく、OKとのこと。午後、主治医は写真を示しながら手術のことを説明して下さった。この主治医は、手術は慎重ですし、納得いくまで説明して下さるので、ありがたいといつも思っています。薄くやわらかい腸の粘膜層筋層なので開くのがうまくいきました。今日の午後少し遅く、昼食も五分粥からで、外科手術と違って内視鏡手術はとって楽でした。点滴は手術時の薬剤だけで、2時に外すことができ、ホッ！今のところ手術はうまくいき元気で、もう午後はいつもと変わらない生活を送っています。

12月17日 プーチンと安倍首相の会談。北方四島で共同経済活動を行うための協議で合意。領土交渉は進展なしとのこと。日米安保条約下、従属関係にある日本である以上、領土問題は解決しえないのは当然です。安倍首相は「レガシー」をめざしたのでしょうか。経済界にとっては北方領土での事業で、中国・韓国に先を越されてきたのですから、願ってもないことでしょう。谷内が外務省時代に、原子力

廃棄物を北方領土に、ロシアと共同でと推し進めていた構想も、また復活するのでしょうか。ロシアは「原則」通りに行動しましたね。

シリアの内戦もロシアの「原則」が結局、局面を打開しています。今後はシリア全土での停戦を目指すでしょうが、ロシアとトルコの関係や、イランとサウジの関係など様々な要素にトランプ政権も加わって、2017年の中東は大きく動きそう。と言っても、国家エゴの力関係が局面をつくるだけなので、人民勢力の闘いは、それを見据えてより困難の中の闘いです。とくにパレスチナの反占領の闘い、トランプはネタニヤフ政権の要求に応え「入植地凍結」を求めないだろうし、プーチンはアラファト時代のPLOの信義のなさにうんざりして、シリア支持を打ち出したKGB系だし。BSD運動の広がりや、ユダヤ人社会、国際社会（イスラエル内外の）とパレスチナ連帯を育てることが、パレスチナ側のまず重視すべき闘いになりそう。ファタハの7年ぶりの大会で、アッバス再選のファタハは「政府機能」に益々傾いていて、解放闘争の役割をとくに失っているようです。

12月18日 新聞では、トランプがイスラエル大使にデービッド・フリードマン弁護士を指名し、フリードマンは「永遠の首都エルサレムで仕事することを楽しみにしている」と表明したとのこと。何と挑発的な第一声かと驚かされます。

イスラエルが80年に、東西エルサレムはユダヤ国家の永遠の首都と国会決議した際（カーター政権時）、安保理全会一致で非難し認めないため、エルサレムではなくテルアビブにどの国も外交使節を置いて久しい。クリントン時代からユダヤ系米国人が駐イスラエル大使になり、大使館のエルサレム移転も何度も約束し、上下院でも決議してきたのですが、トランプになったら実行するでしょう。それをすでに織り込み済みのフリードマン発言なのです。イヴァンカの夫の指金ですね今後の「二国家共存」の棚上げから放棄へと、ネタニヤフは進むでしょう。それを阻止するアラブの結束や国際社会は弱いけれど、パレスチナ人民や人民連帯から反撃していきたいと

ころでしょう。

12月25日 クリスマス。昨日のベツレヘムのイエス生誕教会でのイブはきつと喜びで人々が笑顔だったことでしょう。23日国連安保理はイスラエルの入植活動の即時停止を求める決議案を賛成14カ国で採択したからです。米国が棄権し拒否権を行使しなかったために採択されました。これまでだってカーター政権時代77年10月28日にはやはり国連総会でジュネーブ協定にも反する入植を止めるよう求められていました。また79年7月20日の国連安保理決議の「入植地非難67年の東エルサレムを含む占領地に対する入植非難決議」14票、棄権1（米国）で可決。さらに80年3月1日の入植地建設非難の安保理決議は米国を含む全理事国の賛成で可決されています。これらはすべてカーター政権時代にあたり。本当は決議を継承すべき米国の大統領はレーガンなのに、イスラエルと「戦略構想合意」でベギン政権の入植政策にフリーハンドを与えました。

とくにクリントン時代では米の中東政策をイスラエルやイスラエルロビーが策定して、クリントンが表明するという錯綜と転倒に至りました。

オバマは結局何も変えられず、最後になって「良心に照らして」拒否権を行使しなかっただけです。もちろんその一撃はグッド！ですが。

イスラエル首相府は国連も国際法も拒否し「恥ずべき反イスラエルの決議を拒否する。従わない」と声明。

シオニスト右派を駐イスラエル米大使に選んだトランプは「国連についての物事は1月20日以降変わる」と声明。ネタニヤフとの同盟のもと米国は再び中東で失敗をやらかす新年になりそうです。

新年はプーチンの「良識」に頼らざるをえない世界が出現しそうです。プーチンの米国への関係改善の呼び掛けにトランプは「プーチンの考えはとても正しい。我々は違った道を進む必要はない」と絶賛しているようすですね。

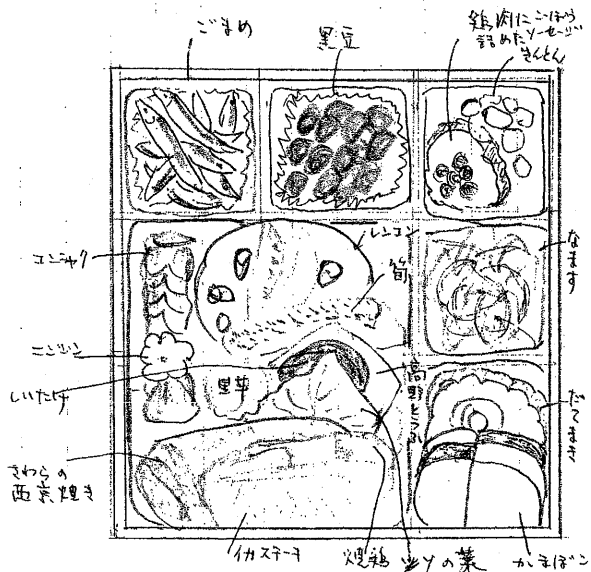
12月27日 今日が今年中に送る最後の日誌になります。28日の仕事納めの朝に投函物提出です。

今年もみんなと交流できてとっても幸せでした。獄中に居るとかえって外のことに一方的に敏感になったりすることも多々あります。獄中の友人たちや公判のこと含めて。みんなの運動活動現場の様子、ことに高江、沖縄やBDSパレスチナ連帯の様子、参加している気分でお便りや資料を読んでいます。また私の作業に資料をしっかりと送って下さった友人にも厚く感謝します。今日も年鑑83~86年版の関連資料を受け取れました。連休前に受け取って年末年始の作業で知りたかったことが丁度入っています。ありがとうございます！季刊アラブもありがとう！「情況」も「キタコブシ」「支援連ニュース」も受け取れました。いつも楽しく読んでいます。またJSRニュースも届きました。

パレスチナは来年からネタニヤフ大統領、フリードマン駐イスラエル大使、クシュナー特使（イヴァンカ・トランプの夫）加えてトランプ大統領で無茶苦茶しそうです。最後の共和党綱領から例年のパレスチナの「二国家」論が削除されていたのも、このカルテットの差し金でしょう。エルサレムに米大使館を移転し入植地の違法をどんどん奨励し二国家論はなしにして、BSD運動を弾圧し国際和平会議もやらせない。そんな方向に行きそうな2017年です。

かえってアラブが結束する機会になれば良いの

2017年御節料理 (19x19cm 9箱)



ですが、エジプトは米国の経済的従属下にあり、サウジは対イランで米・イスラエルと強調したいし。それぞれの思惑がぶつかりながら、それが益々欧米に跳ね返って不寛容勢力が伸長しそう。

だからこそ逆に連帯も強固に、ラジカルに新しい道を切り拓きそうです。パニー・サンダースの支持者も終わった訳ではなく、始まりと位置付けているでしょう。かえってやりがいのある年になる？！

日本は戦略なき直反応的な安倍国家主義がトランプやプーチン、中国に立ち遅れたまま反中国第一外交を貫くことでトランプ同盟にぶら下がりたいたいのかもしれません。「慰霊のアジアの旅」から考え直す気はないような日本。どうなるでしょう。

今年の4月の手術、祈り励まして下さった友人たち、腸の拡張術も済み元気に新年を迎えます。感謝を込めて良いお年を!! I子さんありがとう！そちらこそ体調の回復を！祈ります。

12月28日 今日は仕事納めです。晴天でも風の冷たい日。こんな日は世田谷時代のボロ市が思い出されます。いつも寒い風の中、楽しかったものだから。

今日は、午後処遇主席に呼ばれました。12月13日に発信した文章原稿は、検閲に引っかかっていて、発信されていませんでした。その理由は、過去の闘争を評価するような記述がある箇所を再考するように指導する、というものです。パレスチナの解放闘争の歴史で、多少出てくるだけなのですが、かつて八王子にいる時に出版し（「革命の季節」）リッダ闘争の記述もあること、また、自分の事件（ハーグ闘争）には触れていない記述である旨伝えたのですが、矯正施設に在って出版となると、立場上も事件を評価する記述を許せば、何をしているのかと税金泥棒のような謗りを受けることなど、また、事件に触れていなくても、違いはあるがとヤクザ組織の話がされて、集団としての行動についての記述の基準からして、ふさわしくないとのことでした。思想信条を制約される思いはありますが、指摘された箇所を再検討することにしました。その上で、自分で書き直し、またはそのままか、判断し再提出（来年になっ

てしまいますが）し、その上で再び指導が削除措置に委ねることにします。私としてもそうしたことは意識して、事実関係を記したつもりなのですが……。処遇主席は、とても丁寧に趣旨を説明して下さいだったので、休み中再検証します。

1月元旦 起床前からやわらかい日差しが届き、点呼の7:30を過ぎて、7:45頃に初日の出が獄窓から見え始めました。もう昨日からの新年の始まりに祈ったけれど、また祈りつつ今年ももっと勉強し学習したいと、意欲と好奇心と自分の立場を忘れないように、と誓いました。アラブにいた時も、元旦は地平線に向かって、ある時には水平線から昇る初日の出に祈りつつ、気持ちを立たせたものでした。日本の良い習慣の一つだと思います。午前中に賀状たくさんありがとう！

1月4日 仕事始め。年末に送ってくださった資料や書籍が届きました。

ずっと晴天続き。ベランダにカーディガンをはおらずに出て、ウォーキングしていると少し汗ばみます。正月が晴天というのは、何だか良いことが起こりそう！と思わせてくれます。

初診察。体調は良好と伝えました。今年も主治医の世話になりそうですが、今のところ、腸の方も大丈夫。CVポートの洗浄をして診察も終わりました。

送ってくれた「沖縄の新聞は本当に偏向しているのか」「戦後政治を終わらせる」など受け取りました。感謝です。友人は肺癌の手術をしたのですね。でも元気そうです。今年もよろしく！お便り賀状ありがとうございました。

1月5日 初の布団干し。午前中は初のグラウンド運動。カーディガンをはおらず、薄着で外に出たら、風が強くて寒い！グラウンドは、まだ霜が解けずにぬかるんでいて、芝の上を走りました。走ると風に飛ばされそう。そうか……今日は小寒でしたね。ぐんと寒くなります。でも走ったらポカポカ。空は真つ青な海の色。

今日も年末に送ってくださった年鑑コピー、ニュ

ーズウイーク、出版社の冊子など受け取りました。友人たちの賀状やお便りに、元気そうで安心しました。今年もどうぞ宜しくお願いします。お互い、少しずつどこか故障して、かつてのようにできないことも増えてくる年ですが、違ったいろいろのことが見え、また語れるような新年に！と。

1月10日 3連休が明けました。学校は新学期が始まる日でしょうか。昨日は成人の日の寒い中、なぜかスチームが午前・午後とも入らず寒い状態でしたが、今日は快晴にスチームが入っていてホッとします。

もう友人たちも正月気分は抜けて仕事に、活動に忙しくなっている頃でしょう。旧友は市議二期目で奮闘中の様子。いつのまにか夫が三食とも食事つくってくれていて、はりきって二人三脚の様子。今年も活躍しよう！みな活躍していますね。

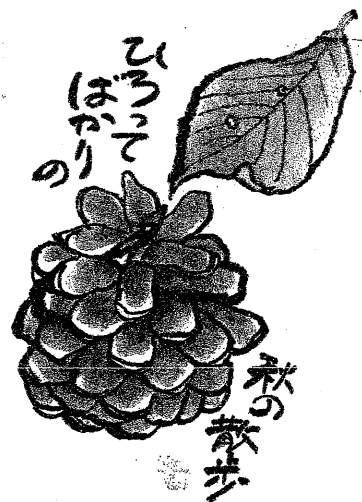
友人はトランプ政権を分析しているので資料送ってくれました。感謝。資料の中でトランプの長女イヴァンカの夫ジャレッド・クシュナーのことも出ています。この人物が正統派ユダヤ教徒で、イスラエルロビーの顔であるデービット・フリードマンを駐イスラエル大使に送り込ませることに成功しました。かつて米政府はユダヤ系米国人を駐イスラエル、駐アラブ大使にしないようにしてきたそうですが、クリントン時代にマルティン・インディックが駐イスラエル米大使になって以降は特使も含めてユダヤロビーが係わってきましたが、それにしてもクシュナー、フリードマンコンビ「ネタニヤフイスラエル首相よりさらに右の強硬派」です。「イスラエルも有難迷惑ではないか」という声もあるほど。彼らはラマッラー近郊のベイト・エル入植地に寄付をして来たし、トランプ財団もそこに肩入れして寄付しています。西岸入植地併合を求め二国家案反対、米大使館エルサレム移転を主張しています。エルサレム移転は時機を見てやり遂げるでしょう。

今年の中東は米国とロシアの「山分け」などという記事もあります。ロシアがシリア、エジプト、トルコ、レバノン、イラン、イラクと友好を強めそうです。でもだいたいトランプは4年間政権維持でき

るか……と。パレスチナのBDS運動と連帯で闘い続けてほしいです。ロシアは百万を超えるイスラエルへの移民がいて、ユダヤ系オリガルヒのアブラモビッチを介してロシアの「ガスピロム」はイスラエル沖の海底天然ガス油田をイスラエル側と共同開発する20年契約を結んだようです。そこはレバノンも領海を主張している天然ガス油田のところではないかと思えます。プーチンは原則的ではあるけれど（入植地問題）パレスチナには肩入れしないで来たので、今後どう関わるのでしょうか。もともとシリアのアサド大統領とアラファトの対立時代から一貫して反帝のシリアを支持し、アラファトには批判的で「うんざりしている」と言っていたKGBでした。アラファトのオスロ合意以降米欧頼りのスタンスなので、

「国益」を第一にしてすすむ限り、パレスチナへの関わりはあまり期待できません。去年にはロシアも中東和平に求められれば関わるという話もあってけど。

さてトランプ時代の日本。「オスプレイ事件に見られる様に50年代占領下の関係のままですが、日本独立・自立の時代のきっかけになるといいですが。「反中国」で手を携え、米トランプと二つの中国までいきたい安倍政権かもしれません。でもASEANは中国と「国益」中心に関係を強めています。



1月11日 今日の新聞にはトヨタ「米投資1.1兆円」とか。まだ大統領に就任しないうちから米国の雇用をツイッターで作り出して、トランプをいい気にさせていますね。「大統領上級顧問にイヴァンカの夫クシュナー」の記事。「親イスラエル・反イラン」あとは米国の利益の武器軍事航空産業の市場として中東と関わるということか。いろんな資料を読むと旧冷戦時のように棲み分け（山分け）の米・ロ関係予測が多いですね。

米国内の分断は更に進むし「反中国」もイデオロギーではなくビジネス感だし、米国にとって混乱の年になりそうです。と言っても、結局はヒラリーと同じく格差も解決しえず富裕層はより豊かになっていくでしょう。

Yさんこちらこそ今年も宜しく。土曜会の様子送って下さってありがとう。10・8山崎博昭プロジェクト、高江ヘリパット反対闘争関連報告など、12月も様々な報告・討議の上、忘年会も楽しんだ様子です。（まだ一頁目しか交付されていませんが）みんなの真剣で本音で語り合う様子が浮かびます。我らが先輩Oさんは飲みすぎませんでしたか？忘年の宴、新年の宴とO先輩に限らず、みな健康を考えつつ今年の交流も楽しんでいることでしょう。今年の沖縄益々本土の側からの連帯が問われますね。

フォーリンアフェアーズありがとう。今日は封筒のみでした。

書き忘れましたが、こちら今年はいままでよりも「お節料理」らしいものでした。三が日の食事は東拘とちがって普通食で朝みかん一個、昼お菓子という三が日。1月5日にお雑煮でした。喉に詰まらせたら困る病院なので、仕事始めの後の人の多い時にお餅2つのお雑煮でした。今日は聴力検査、房の引越し獄もあれこれ多忙の日々です。寒い八王子から。

1月12日 先に手紙だけ受け取っていた写真届きました！（沖縄）写真①からメインゲート前土曜行動。③～⑥安部の浜オスプレイ墜落現場で抗議する人や米海兵隊緊急集会900人の写真⑦と、順序よくレポートと写真で、現地の様子が臨場感で伝わっ

てきます。12月20日には「確認訴訟」判決の日。「式典」に対するスタンディング抗議の写真。名護署前で、逮捕されている山城さんらへの激励行動の写真。この日釈放になった二人も激励行動に参加。福島みずほ弁護士が接見した様子など。確認訴訟は、県側敗訴は織り込み済みで、司法への怒りが増すばかり。21日には高江音楽祭、22日には「式典」の日。沖縄万国津梁館前のスタンディング抗議と、オスプレイ撤去を求める緊急抗議集会4200人。翁長知事の登壇のすごい熱気。翌日の沖縄タイムズ記事まで46枚の写真とコメント。とってもよくわかります。ヘリパット地区の警備側のスタイルは、万国共通の身を守る装備や鉄条網。ほんと、芝生は貼り付け、大きな切り株根っこそのままの即席ぶりも写真にしっかり写っています。②の写真、福島弁護士接見の日の窓から手を振る山城さんも写っています。そーか、こういう闘いか……と深呼吸。どうもありがとう。私だけ見るのはもったいない臨場感。友人に見せてあげたい。行きたくても沖縄まで行けない友人に。

1月13日 房を移ったら少し暖かい。すきま風がないためでしょうか。暖かいという程ではもちろんないけれど。

花も届いて、13日の金曜日は良い日です。うすい藤色グラディーションの菊のスプレー。小菊の黄のスプレー2本、日日草の白3本、それにマルポーロレッドのカーネーションです。かすかな菊の香りは、スプレー小菊の黄から。今年のリラックスに深呼吸しています。

1月15日 全国的に大雪らしいのですが、八王子は快晴です。寒いけど。

今日は世田谷の楽しいボロ市の日。一挙に「日出屋」の子供時代を思い出しています。寒い中、震えながら一日に何回もボロ市に出没しては、香具師の口上に憧れて聞き耳を立て、覚えては家族や近所の子と真似て遊びました。

1月18日 今日は最高9度最低-2度。庭のトラ

ックは霜で真白。ベランダの運動は風が冷たい。

午後は今年初のコーラスです。正月だからと「富士は日本一の山」を歌ったのですが、若い人は誰もこの歌知らない、とソプラノの先生はびっくりしつつ教えてくれました。次は「雪の降る街を」この歌も誰も知らないとのこと。とても良い歌なのに。

歌唱指導中に耳鼻科の診察の呼び出しで私は中座しました。耳鼻科では1月11日の聴力検査の結果を外來の医師がチェックしてくれて、難聴は去年と同じで特に変化は見られないとの診断でした。

新年の救援や人民新聞、「かりはゆく」など届いています。「はなかみ通信」も新年号届きました。幸ちゃんの「昔は未来・マーブルの海」は（完）で終わってしまったのです。今号で。子供時代の「そうそう」というような同世代の幸ちゃんの率直な記録はいつも楽しみでした。幸ちゃんの子供時代から一歩引いて自分を観察する眼が光っています。そこがとてもいいのです。「水たまりと日だまりの京都」も徳正寺が出てきて読み応えがありますね。どんなお寺だろうと想像しています。矢谷さんのトランプ評はまさに今言われている姿が描かれていますね。ゆっくり読みます。感謝！

1月22日 日曜日。昨日の夕刊と今日の朝刊はトランプ就任式一色です。「再び米国の偉大にする」「米国第一主義」を前面に、TPP離脱やNAFTAは再交渉とのこと。

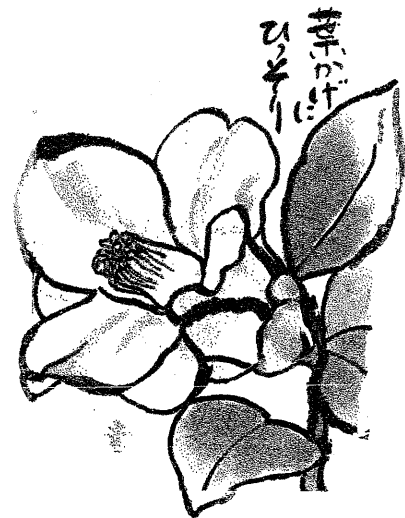
だけど米国が米国の国益を第一にしなかったことってあったでしょうか？戦後のマーシャルプランから日米安保含めて米国第一主義の反共戦略の産物でした。米国の国益に反しても我慢して制裁でなくニンジンでやっと合意を求めたりしてきたのは唯一イスラエルに対してだけ。それらはユダヤ資本や政治家エスタブリッシュメントの米国内の権益と結びついているからです。

米国の衰退は米企業が始めたグローバル経済で世界の国々に格差を生み、それが逆流して自国の国民よりも利潤の論理優先した結果であって、他の国々のせいではないのです。無制限な市場主義・グローバル化に対処療法も効かない程中産階級を衰退

させた結果、人々の革命と体制変化の要求があったのをサンダースとトランプが掬い取ってきたのです。資本家たちがサンダースを抑え込み、トランプを抑え込めなかったのは、トランプの主張に利権を見出す軍需産業や銃信奉社会やエネルギー産業などがしっかりと後押ししてきたからでしょう。

メディアは「ポピュリズム」と批判するけれど、ポピュリズム一般を否定して人民の運動や要求をも否定する傾向が感じられます。トランプ就任に抗議の波もポピュリズムの一つの姿でしょう。人々はトランプの排外主義・人種差別主義・デマゴグ・ポストトゥルースを許さない流れです。政治家が国民の要求を掬い、実現しようとする中身としてトランプ政治が問われているところです。

トランプは戦略がない分、目先の「米国にとって利益」に矛盾することを同時にやりそうです。外交では単独行動主義や安全保障よりビジネスに重心がありそう。でも旧来の保守の「オブショア・バランシング戦略」をとるならクリントンら「民主主義マフィア」の介入主義戦争屋たちよりましになるかも。「トランプ演説は内容ない」と言われつつ、国民第一主義を掲げていることで、米国内で求められているリーダー「変革者」です。サンダースとちがって大企業規制も国民への再分配もなし得ず、逆に企業の利潤追求を加速させることで「おこぼれ」の雇用



を増やすという戦略になりそうです。でも、この現体制と現世界秩序への挑戦には良い面も悪い面もあり、国民主権の徹底と世界的には反戦と反排外主義の連帯の徹底でトランプ化対決が革命的に問われていくでしょう。エモーショナルな煽動者トランプの演説を読んだ感想です。

1月23日 八王子は最高6度で最低-3度。でも2月寒いのが八王子で、最高がもっと下がります。

Kさんとうとう愛犬龍之祐くんは15年半の正命を終えたのですね。元旦に亡くなったとのこと。「大往生なのですが、ずっと一緒だったので喪失感が大きく、独りになってしまいました」と辛そうです。お連れ合いが亡くなられた時も、もっと苦しみながら前向きに乗り越えて来られたのですから、元気になってほしいものです。丁度今日の新聞歌壇に“糞を出し尿を出して哭声をやさしく出して犬逝きしとふ”とあります。

1月25日 年末からのシリアの停戦がロシア、トルコ、イランの仲介で継続しそうです。空爆がなくなれば故郷に戻りたい難民の数は計り知れません。まずもって難民の帰還のためのシリア復興へと停戦を実体化することこそ空爆や政治的駆け引きより大事です。トランプ路線がシリアのロシアの役割を認めていけば、ロシア、トルコ、イランでの動きがもっと有効になりそうです。

パレスチナでは大統領交代の1月20日から入植地拡大が益々のようです。トランプ・ネタニヤフ会談に注目したい。寒い！

1月26日 グラウンドは風が冷たい。見上げると雲一つない青空。走るとやっぱり汗ばむ1月の八王子です。もう大寒中ですが、こちらの2月が寒いので、今はまだ大丈夫。

デジカメ歌人から百日紅の成熟した果実。もう種が飛ぶ寸前の写真です。「この黒に厳しい時代と冬に負けない強い意志を感じています」と。“監視カメラ善悪を映し広がり我が息つく隙間は消ゆる”この

一首もいいですね。“涼やかな眼の人にあう冬の朝ひとひらの風吹く駅広に”私の方は良い歌がつかれません。政治動向に注目しているとなかなか……。こんな歌になっちゃう。“新聞を開ければ今日もトランプの人々さわがす大統領令”

1月30日 新聞ではトランプの大統領令、中東・アフリカの国民の入国を一時禁止するとした措置が、世界に混乱を広げているという。「世界各地、米国で拘束・搭乗拒否 280人」「連邦裁は送還認めぬ仮処分決定」。トランプの持論に沿って、人種差別行動が広がっています。それに賛同するネタニヤフの「壁建設絶賛」の記事も。

これまでのところ、トランプの仕事のうち、ロシア・プーチンとの電話会談で、対立から協力への兆しがあったこと以外、国際社会にとってプラスはないですね。それでも壁をつくったり不法移民取り締まりは日本の方が厳しいので、日本政府にとっては当然とっているでしょう。勿論生地主義、移民の米国と血統主義の日本とはちがうけれど。

2月上旬にネタニヤフ訪米の折、米大使館のエルサレム移転が表明されるよう、ネタニヤフ側はトランプの家族のユダヤ教徒であるクシュナーやイヴァンカ、イスラエルロビーで圧力をかけているでしょう。「父が大統領になったら100%エルサレムに米大使館を移転する」と、ユダヤ人の集会でも明言してきたイヴァンカ。トランプはむこうみずで決断するか、それとも一呼吸置いてチャンスを待って移転の大統領令を出すか見ものです。どちらにしても、遅かれ早かれ移転するでしょう。こうした振る舞いは独・仏らEUの価値観と溝をつくり、EU諸国のトランプ派らは、良くも悪くも「主権をとりもどす」勢力に有利に作用させていきそうです。その分、人権をめぐる闘い、価値観をめぐって国際社会、米国内で更に変革の波高しですね。

サンダースは「トランプが米国労働者たちの環境を良くするための政策に取り組むならば、自分たちは協力する。しかし、人種差別、性差別、排外主義や反環境政策の方へ突き進むなら断固闘う」と表明していました。トランプに国民主権を求めるのは無

理でしょう。

それにしてもネタニヤフの横暴、22日、トランプの就任直後からオバマで抑えられてきた、西岸入植用2,500のイスラエル人住宅建設など、12月の安保理決議の「入植地は違法、即時に停止」を既成事実で黙らせようとしています。そしてトランプがその支持でもりあげているところ。

昨年11月の日本のカジノ法案の突破の強行採決は、カジノ王アデルソンと支援関係にあるカジノ盟友、トランプファミリーへの手土産だったのでは？という分析もあります。これらは人口減のロシアとも繋がり、モスクワー東京、北方領土経由の鉄道に加えて、北方領土は日露でカジノ特別区をやると推理するジャーナリストもいるとかから

何よりも人々が生きる、というシンプルな共存の価値、人権を擁護、軍縮差別、と様々な分野で貫くことが問われる厳しい時代に至っています。

1月31日 早くも一月尽。今日は、忘れていた小学校時代の写真をどれが自分か？と探しながら見ました。幼友達たちが同期の1957年卒業生で、昭和27年(1952年)入学から各一年ごとの集合写真アルバムを作ったのを送ってくれました。戦争中と戦後生まれを含む1945年生まれで、人数は他の学年より少ないのです。世田谷区桜小学校203人の児童同学年アルバムです。幼なじみが住所を捜して送ってくれたものです。当時のみんなの髪型や服装に驚きつつ、とっても懐かしい。先生もずいぶん若かったのだと、改めて見つめています。

トランプ騒動(七ヶ国入国禁止措置)に、司法当局が憲法違反の疑いを主張し、国際社会も西側諸国が批判的コメント。我が安倍首相はやっぱり予想通りの「コメントする立場にない」と。自立・自決の日本の機会よりも、さらなる対米忠誠従属へと…。新聞の報道がヒラリーとトランプの当選を見誤ったように、きっと今頃は「トランプ万歳！」の声が何も書かれていないけど、同じくらい、またはそれ以上に「よくやった！」という排外主義として米大陸を席卷していることでしょう。変化をより良い方向へ！と念じています。

トランプ政権とパレスチナ

重信 房子

1、トランプ大統領就任

トランプ大統領就任演説は、「変革」の決意に満ちていた。

「今日のセレモニーには、特別な意味がある。なぜなら単にある政権から別の政権に、あるいは、ある党から別の党に権力を移行するだけではないからだ。我々は、首都ワシントンから権力を移し、国民のみんなに戻すのだ」と既得権層を批判し、「本当に大事なことはどの党が政権を握るかではなく、国民によって政府が支配されているかどうかということだ」と。米国は、過去の豊かさや自信は消え、「何百万人も米国人労働者のことは一顧だにされなかった」と。バニー・サンダースの発言とみまがうようなレトリックに充ちている。「この日から新たなビジョンが私たちの地を統治する。この日から『米国第一』だけになる。「米国第一だ」と、唐突に論理がすり替わり、排外主義へと飛躍する。左派ならば、自国資本主義制度を批判し、再分配や制度的変革を求めるところ、トランプは違う。「貿易、税金、移民、そして外交問題に関するすべての決定は米国の労働者や米国民の利益になるものにする。我々の製品を作り、我々の企業を奪い、雇用を破壊する他国の行為から、我々は国境を守らなければならない。防衛が大いなる繁栄と強さをもたらすのだ」「我々が守るのは、二つの単純なルールである。米国製品を購入し、米国人を雇用することだ」と述べている。トランプドクトリンは国民主権ではなく、この米製品を買い、米国人を雇用し、米国第一で国民を豊かにするという事に尽きる。

そして、「テロリストに立ち向かいテロを絶滅させる」と誓う。「我々の政治の基盤を成すのは、米合衆国への完全な忠誠にある。そして国に対する忠誠を通じて、我々は互いの忠誠を再び見出す。皆が愛国心を持てば、偏見の入る余地がなくなるのだ」「もっとも重大なのは、我々は神から守られているということだ」として、国家主義ナショナリズムで

排外主義を煽り、「再び米国を偉大な国にする。神のご加護を」と、演説を結んでいる。

バニー・サンダース、「トランプが米労働者たちの環境を良くするための政策にとりくむならば、自分たちは協力する。しかし、人種差別、性差別、排外主義や反環境政策の方へ突き進むなら、断固闘う」と宣言してきた。

トランプ大統領の排外主義全開の就任演説に示されているのは、貿易、移民、外交問題に至るまで、「米国の利益」のために奮闘する決意である。しかし、だれの利益なのか？ 米国政府は、これまで声高に叫ばなかっただけで、常に米国第一、米国の利益を貫いてきたのではないのか？ 米国の現状は、米企業、米支配層が自己の利潤、特権のために、米国民を犠牲にしてきた結果に過ぎない。同日トランプは、「米国第一エネルギー計画」「米国第一外交政策」など、外交貿易に関する六項目主要政策を発表し、TPPからの離脱、北米自由貿易協定 (NAFTA) の再交渉、年4%成長への回帰、法人税の「世界で最高水準の税率を引き下げる」と表明した。そして、外交・安全保障政策については、米国の国益と安全保障を最重視すること、そのためには防衛予算の削減を終わらせ、米軍事力の再構築を集めていく方針を示した。そしてイスラーム国 (IS) などのテロ壊滅を最優先課題と位置づけ、またオバマの進めた医療保険制度改革 (オバマケア) の撤廃に向けた大統領令にも署名し、新たな規制の凍結も指示し、企業・投資の誘致を始めている。トランプの「革命」はなりふり構わぬ「米国第一主義」であり、規制を緩めて企業のフリーハンドを強め、法人税を下げ経済成長を狙うゼロ・サムゲームのパイの強奪にある。結局、中間層や貧しい米国人ではなく、新たに資本を活性化させる目論見である。その割に国内の福利厚生は放置され、国際秩序を形作ってきた国連を含む環境など公共戦を軽視していくようである。トランプ大統領は、これまでの安全保障中心の外交よりも

米国第一の保護主義に基づいた貿易と商取引を中心に据えている。それに合わせて、国際協調から単独行動主義へ、集団的な安全保障や貿易協定から二国間協定へと転じている。こうした米国の二国間協定や単独行動主義の米国の動向を受けて、各国は自主を求め、ブロック化を含む新しい集団的秩序作りを求めるだろう。世界のトランプ化——自国中心に再編する動きは今後も加速せざるを得ない。すでにイスラーム七カ国からの入国を認めないとした「反テロ」口実の措置は、米国の国際信用も失墜させている。査証やグリーンカード保持でも拘束や入国拒否に至り、15州司法長官らも違憲、違法と批判している始末である。トランプは大統領職を続けられるのか？ しかし、これでさらにトランプを熱狂的に支持する勢力も国の内外で増えるだろう。欧州首脳の批判や見解と違って、我が安倍首相は「コメントする立場にない」と明言を避け、日本の米国に対する従属と忠誠の姿を世界に晒している。

2、米国外交の転換

オリバー・ストーンは、「トランプ大統領もあながち悪くない」と主張している。

「ヒラリー・クリントンが勝っていれば危険だったと感じていた。彼女は本来の意味でのリベラルではない。米国による新世界秩序を欲し、そのためには他国の体制を変えるのが良いと信じていると思う。ロシアを敵視し、非常に攻撃的。彼女が大統領になっていたら、世界中で戦争や爆撃が増え、軍事費の浪費に陥り、第三次大戦の可能性さえあった。」トランプは『米国ファースト』を掲げ、他国の悪をやっつけに行こうなどとは言わない」と。また、「トランプは、イラク戦争は膨大な無駄だと語っており、米軍を撤退させ、米国の介入主義が弱まり、自国経済を機能させてインフラを改善させるなら素晴らしい」と、ストーンは述べている。

どこまでトランプに期待できるかは疑問だが、少なくともネオコンやヒラリーに示される「介入主義」が当面断ち切られたことは朗報と言えよう。現在、世界史的な欧米資本主義の崩壊再編成過程にあつて、これまでの行き詰まりを再びウェストファリア条約



の主権の復権が求められる傾向がある。なぜなら、ネオコンやヒラリー・クリントンに代表されてきた介入主義は、「民主主義」の名で「内政不干涉」原則のウェストファリア条約を軽んじ、「制限主義」を展開してきたからである。

冷戦崩壊を経て、資本主義経済がグローバル化した当時、乗じて「民主主義の拡大」を「市場の拡大」と同一視し、「普遍的価値」としてそれを推し進めたのはビル・クリントン政権であった。クリントン政権の政治理念は「市場民主主義」と規定し、第一に世界市場への統合、第二に複数政党制、第三に自由選挙を要求して、ポスト社会主義国に介入した。この「市場民主主義」の介入によって大きな国も小さな国も内在的な文化と伝統の歴史に基づく国際関係を拓きえず、歪んだ状態が作り出されていった。

「市場民主主義」の介入は、ソ連・東欧の社会主義国破壊の論理として、ユーゴスラヴィア・中東・アフリカへと正当化された。

さらには、「自国の市民を虐待し、近隣諸国の不安定を煽る国の政府はその統治権を剥奪してよい」とする考えが生まれ、99年にトニー・ブレアはリベラル介入論を理論化し、「一部の重要な側面では、内政不干涉原則は制限されなければならない」とした。

2005年には、国連サミットで、「保護する責任」という概念を打ち出した。ボスニアやルアンダの虐殺問題を利用し、自国民に対する残虐な行為を阻止できない場合、国際社会が介入して市民を保護

するという行動基準を作り出した。この結果、欧米主要国は、選択的、恣意的にこの論理を使って利害を実現してきた。リビアに示された政権転覆暴力は「民主主義マフィア」とも呼ぶべき介入主義者の論理によってなされた。その結果、さらなる混乱と破壊を招いてきた。

この介入主義者たちのイスラエルをめぐるダブルスタンダードが明らかであったために、中東では受け入れられる余地は小さかった。しかし、権威主義政権への批判勢力として、宗教を利用し、支援介入し続けた。もっとも非民主的なサウジアラビアやカタールは親米政権のため、「介入」ではなく「同盟」しながらであった。すでに「シリア問題」に示されるように、こうしたご都合主義的な介入主義は、現実により越えられてしまっている。ロシアのイニシアチブで、イラン・トルコの地域諸国による秩序の再構成へと現実は進行している。介入主義は、右であれ左であれ、権威主義政権国家やさらには西欧諸国内でも自国主権の強化を主張する勢力の台頭に追いやられている。

保守論客のジョン・ミアシャイマーは、「米国はグローバルな軍事関与を控えよ、オフショアバランシングで米軍の撤退」を訴えてきた。(フォーリンアフェアーズ 2016 NO.7) オフショアバランシング戦略とは、海外の米国の国益、安全保障にとって欠かさない地域にのみ、選択的に関与すべきという考え方である。(この論者は「イスラエルロビーとアメリカの外交政策」の著者でイスラエルロビーがいかにか米国益を損なっているか批判しているネオコンと対立する立場にある。)

「米国が防衛にコミットする地域を限定し、地域諸国に防衛の任の重責を担わせる。それによって、国内投資と消費に回す資源が増え、危険に晒される米兵も減る。同盟諸国は米国の軍事的保護にフリーライド(ただ乗り)しており、冷戦以降どくなっている。冷戦後に、オフショアバランシング戦略を放棄し、「リベラルな覇権」を行ってきたことが外交の破綻を呼び込んだ」ととらえている。そして、「米国が『リベラルな民主主義』を拡散したいなら、自ら範を示すのが最善だろう」と述べていた。

介入主義の作り出した混迷は、トランプ登場を促した一因といえる。こうした保守路線は、トランプの外交政策にも影響を与えるだろう。新政権がロシアと戦争せず、主権国家を転覆させることに興味がなく、経済戦争勝利にこだわるならば、オリバー・ストーンのように「あながち悪くない」かも知れない。しかしまた、トランプ流愛国心理のように強権排外主義の「米国第一主義」で突き進む限り、それは帝国主義の露骨な争奪戦時代への誘導に転じていくだろう。ロシアとの「反IS」の共同も、あるいは、それからのロシアとの敵対の派生も、中東のロシアの戦略、イニシアチブの下で、トランプ政権が試されようとしている。

トランプ化・差別や入国禁止に熱狂する危険な波が席卷しようとしている。逆に言えば、国民主権の民主主義に国際的に連帯し、人権・反戦・反差別・グローバル共存の新秩序に向けた社会革命が求められる時代に入ったようである。

3、「バルフォア宣言」100年目のパレスチナ

トランプ大統領の登場はパレスチナに何をもたらすのだろうか？

パレスチナの自治政府大統領マフムード・アブバースは、2016年9月22日国連総会で演説し、1917年の「バルフォア宣言」から間もなく100年になるとして、英国政府に対し謝罪を求め、パレスチナ国家承認を求めた。「バルフォア宣言が生んだ悲劇や不正に対するパレスチナ人への謝罪を含む責任を引き受け、国家承認を含めて改善に動くことを英国に求める」と。パレスチナ・アラブ人にとって、「バルフォア宣言」は過ぎ去った過去の話ではない。現在の困難の原因であり、イスラエルの入植地拡大に示されるように、明日も引き続きパレスチナ民族の危機、現在の問題として、立ちはだかっている。

「バルフォア宣言」は、英国がオスマン帝国にとってかわり、中東植民地支配を目指した、現在を規定している遺産である。英国が支配のために策謀した三枚舌外交の一つが「バルフォア宣言」であり、直接パレスチナ民族の破局をもたらしてきた元凶であ

った。

1915年から16年にかけて、預言者ムハンマドの家系のメッカの太守シャリーフ・フセインに対して、オスマン帝国に対する反乱を促し、勝利の後にはアラブ独立国家を認めると約束。これが第一の策謀であった。

第二の策謀は、1916年の「サイクス・ピコ秘密協定」で、オスマン帝国から勝利した後に英仏露の3国で領土を分割するという秘密合意であった。この合意は、シャリーフ・フセインとの約束を裏切るものであり、かつロシア革命当時この秘密協定がレーニンのボルシェビキによって暴露された。しかし、その後もこれを修正しながら、英仏による中東支配密約として、実行されるものになった。

第三の策謀が「バルフォア宣言」である。パレスチナにユダヤ国家を作るために19世紀末に生まれた政治運動シオニズムの要求に、時のロイド・ジョージ内閣の外相バルフォアが答えたものであった。

バルフォア宣言の全文は1917年の11月2日付の、以下のように短いものであった。

「親愛なるロスチャイルド卿

英国政府を代表して、私はユダヤ人・シオニストの願望への共感を表す以下の宣言をお知らせします。これは閣議で承認されたものです。

『英政府はパレスチナにユダヤ人のための民族郷土を建設することに賛成し、この目的の達成を容易にするための最善の努力を払う。ただし、パレスチナに居住する非ユダヤ人社会の市民的、宗教的、権利及び他の諸国におけるユダヤ人の享受する権利と政治的地位を損なうようなことをしない旨明確に認めること』

この宣言をシオニスト連盟にお伝えいただければ幸いです」と。

当時、イギリス・シオニスト協会の会長であったロスチャイルド一族のウォルター・ロスチャイルドにあてた書簡であった。

この短い文を理由として、英植民地支配のパレスチナにシオニストは建国を始めたのであった。当時は、シオニズムよりも「同化ユダヤ人」が多く、同化ユダヤ人は、ユダヤ教を利用したシオニズム運動



が各国で同化しているユダヤ人に対して、ユダヤ人排斥を正当化させると反対していた。事実、欧州でナチズムに至るユダヤ人排斥と結びつくのは、ナチズムとシオニズムが合わせ鏡のような排外主義と優越思想を持つ故であった。

そしてまた、バルフォア宣言で意図的に記されている点が、後に明確な植民地差別支配に使われる根拠となった。つまり、「パレスチナに居住する非ユダヤ人社会の市民的宗教的権利」のみを記し、「政治的権利」を欠落させている点である。初代パレスチナ高等弁務官として1920年から25年まで、シオニストの国づくりに尽力したハーバード・サミュエル自身がシオニストの同志であり、パレスチナ・アラブ人に対して政治的権利を無視していくのである。

この「バルフォア宣言」を英国政府代表ワイツマンら英国シオニストと交渉したのは、マーク・サイクスであった。彼はまた、「サイクス・ピコ協定」の英代表当事者でもあり、シオニズムの信奉者であった。その後1919年第一次大戦後の講和をめぐって、米国ウィルソン大統領も加えて、パリ講和会議が開かれていった。この時中東地域の分割支配を企む英仏と独立を求めるアラブ側の要求で対立し、ウィルソンの提案でアラブ地域に調査団を派遣することになった。結局、仏が無視して米国調査団しか報告書を出さなかったのだが、この米国の調査報告書は、当時英仏によって握りつぶされた。その結果、「サン・レモ会議」によってアラブ中東地域の英仏委任統治が決定されたのである。その報告書にはア

アラブの独立に向けた現地住民の要求の高さとその正当性を報告し、独立への解決の方向を示しているばかりか、シオニストがアラブ住民を排除し、シオニストユダヤ国家を作る危険性を報告している。シオニストの移民を止めなければ危険であると。

また、サイクスも英国代表として、パレスチナを調査する任務を受けた。この現地調査で、サイクスは、自分の理想のユダヤ人問題の解決、シオニズムとバルフォア宣言がいかに誤っていたかに衝撃を受けた。シオニズムがアラブ人を追放し、排他的に入植を行っている実態を知ったためである。急ぎ帰国したサイクスは、シオニズムの誤りをロイド・ジョージ首相やバルフォア外相、更には英国シオニストの説いて回り、入植の増大は必ず破壊的結果に至ると人々に訴え始めた。この精力的な行動の途中、サイクスはイタリアで、病気で急逝したと伝えられる。

それ以降シオニストの方もあって、反対論はしばらくでいった。シオニストは「パレスチナのほんの一部のユダヤ郷土(国ではない)」と交渉では英国側を説得しつつ、「バルフォア宣言」を得ると、当初のシオニスト大会の決定どおり、パレスチナのユダヤ国家化を図っていったのである。その結果、いわれなく排斥されるパレスチナ人たちがシオニストの入植に反対し、対立が続いてきた。第二次大戦後、1947年のパレスチナ分割決議を経てなお「全土ユダヤ化」を企むシオニストの右派勢力のために、騒乱は現在まで続いているのである。

イスラエルには、「地中海からヨルダン川までの地に、イスラエル以外の主権は認めない」とする右派リカードらの歴代の主張と、労働党らの「アロン計画」という主張がある。「アロン計画とは、ヨルダン川西岸地区のパレスチナ人密集地域をのぞいて、西岸を併合するというもので、アラブ密住地区(ジェニン、トゥルカルム、カルキリア、ナブルス、ラマッラー、エリコなど)は、エリコから回廊でヨルダンに併合させるというものであった。それが「オスロ合意」の原型となっている。つまり、どちらも西岸地区の戦略的地点に軍施設や入植地を建設し、オスロ合意以降も返還を渋ってきたのである。ことにネタニヤフ政権になると、それは益々侵略的となり、

入植地を拡大し続けたまま全土併合を目指している。「直接交渉」を、つまり入植活動を認めたままの交渉を要求し、パレスチナ側がイスラエルを「ユダヤ国家」と認めることを要求してきた。パレスチナ側は入植地の凍結を求め、かつイスラエル国民の2割のパレスチナ同胞に対する法的差別支配となる「ユダヤ国家」規定に反対し多民族国家イスラエルの「ユダヤ国家」定義を認めていない。

バルフォア宣言から百年、ネタニヤフ政権はオスロ合意を反故にし、「二国家案」を棚上げにした現状維持、つまり、西岸全土のイスラエル支配の維持を目指している。パレスチナの首都東エルサレムは、イスラエルの永遠の不可分の首都として併合したまま、サウジアラビアらイスラム諸国とは、対イラン戦略で懐柔すべく、聖地の共同管理を持ち出している。このようにネタニヤフ政権は、対イラン敵視戦略の下に親米欧国家の王制と通商関係を開き、パレスチナ支配の現状固定を目指している。

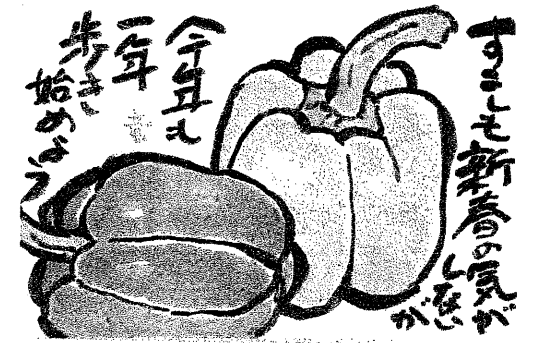
4、トランプ大統領とパレスチナ

トランプ大統領は、歴代米国の政策「二国家解決案」を表明していない。トランプ政権のパレスチナ政策はイスラエル政府が、策定することが多くなるだろう。すでにクリントン政権時代から、イスラエルが策定要求する案を「米国家案」として、パレスチナ側に示してきたのは有名である。またブッシュ(子)政権がアラファト排除を決定し、世界にもそれを呼び掛けたが、実際にはモサドが策定した案をブッシュに受け入れさせ、米国の決断としたものであった。これは元モサド長官のエフライム・ハレウイが少し得意げに自分の案だと記している。「イスラエル秘密外交——モサドを率いた男の告白」新潮文庫)ネタニヤフ政権が肩代わりして、策定する「米国家案」を、トランプはより多く米国政策にするだろう。上級顧問としたジャレド・クシュナーも、駐イスラエル米大使デービッド・フリードマンも西岸入を財政的にも支援してきたし、入植地併合論者であり、二国家解決に反対し、駐テルアビブ米大使館のエルサレム移転の早期実現を求める者たちである。

トランプは、2月15日のネタニヤフとの会談で、

米の中東政策転換を確認しようとしており、イスラエルの安全保障に対して、「空前の取り組み」を明言している。つまり、イスラエルが「最大の脅威」と訴える対イラン対応の一致、これにはサウジアラビアも誘い込むだろう。中東のアラブ・イスラエルの対立構造を、対イランへと戦略化させ、イスラエルとの軍事インテリジェンス(情報分析・収集・分析)治安などこれまで以上の米・イスラエルとの戦略同盟化を実現するとしている。「私は統一エルサレムをイスラエルの永遠の首都として承認する」と述べており、トランプのイスラエルとの、これ以上ない緊密化は国務省との矛盾を生まざるを得ないほどであろう。つまり言い換えれば、パレスチナは一顧だにされない位置に置かれる。しかし、トランプ大統領の思惑だけで、国際社会、中東世界が進むわけではない。トランプの一方的なイスラエルへの肩入れは、国連決議を引き出し、また、パレスチナ問題を逆に焦点化させる。

昨年の12月23日に、国連安保理はイスラエルの入植活動を批判し、即座にやめるよう求める決議案を賛成14ヵ国、棄権1(米国)で採択した。イスラエルの入植活動は法的に正当性もなく、国際法の重大な違反であり、イスラエルとパレスチナの「二国家解決」の実現を危険にさらしていると決議は述べている。すでに西岸地区に43万人、東エルサレムに20万人、計63万人が入植しており、「東エルサレムを含むパレスチナの占領地ですべての入植活動をただちに全面的に停止すること」を決議は求めた。さらに、オバマ政権の最後の12月28日、ケリー国務長官はワシントンでイスラエルを批判し、「もし一国解決を選ぶなら、イスラエルはユダヤ国家か民主国家のどちらかだ。その両方はあり得ない。いつまでたってもイスラエルが平和の内に生きることは不可能だ」と批判した。こうした正当な米国務省の立場は、1年も2年も前に取るべき措置であったが、最後でも示したことは意義がある。ケリー国務長官は、ネタニヤフ政権をイスラエル史上最も右の政府だとも批判した。もちろん、トランプもネタニヤフも反発したが、フリードマン新米大使はそのネタニヤフよりも右の人物である。トランプ政権の



閣僚関係の中で、もっとも「まとも」なのは、「狂犬」と呼ばれたマティス国防相だろう。「イスラエルの首都はテルアビブ」と言明している。ネタニヤフ首相も、しかし万全ではない。自身の汚職で、自身も息子も警察の聴取を受けている最中にある。ネタニヤフ・トランプ・フリードマン・クシュナーのカルテットは、逆にイスラエル内の反リカード勢力を活性化させる結果を生むに違いない。

パレスチナでは、ネタニヤフ政権による2014年のガザ攻撃虐殺破壊の傷が癒えていない。国連の人道調整事務所の報告によると、ガザ地区の5人に1人に当たる51,000人が依然被災難民のままにある。2015年からは9万人減っているというが、ガザの封鎖で、建材資材資金不足で住宅復興は遅れたままにある。一方、トランプ政権になって西岸地区では入植地に2,500戸の住宅建設、加えてパレスチナ人の住宅破壊接收が急速に進み始めた。さらに、パレスチナ人所有のオリーブ2,000本(樹齢500年の大木も含めて)を伐採し始めた。イスラエルは、1月カルキリア近郊で「軍事閉鎖地区」と一方的に指定し、ユダヤ入植地へのアクセス道路の工事を始めた。

これに対して、パレスチナ人、イスラエル人の人権団体らがオリーブの樹に身体を縛り付けて抵抗しているという。こうした激しい全土併合、ユダヤ化の「現状維持」和平会議拒否のネタニヤフ・トランプ体制を覆すべく、新しい動きも生まれている。中東の中で影響力を拡大してきたロシアがパレスチナ問

題にもかかわり始めている。1月9日から、18日まで、ハマスやファタハラを含むパレスチナ勢力の会合がモスクワで持たれた。この会議で、ハマスは、懸案であったPLO加盟に合意した。ファタハラやハマスを含むパレスチナ解放勢力は、唯一合法的なパレスチナ人の代表であるPLOとPNC（パレスチナ民族評議会）にハマスとイスラーム聖戦機構が加わること、そのための新しい議員を2ヵ月以内に選出することで合意した。このPNCがPLOの執行委員を新たに選出するとしている。パレスチナ政府の統一は、何度も問われつつ、実現できずに来た。正念場であろう。

ロシアは、80年代、シリアアサド（父）政権とアラファト派の対立に対し、シリアを支持し続け、現在までその関係は続いてきた。しかし、ソ連崩壊後、PLO指導部が「オスロ合意」を経て親欧米路線をとってきたことで、ロシアとPLOはかつてのような関係にはなっていない。中東全体の秩序を再構築する上で、PLO、パレスチナ勢力はロシアを含む国際社会とアラブ諸国との共同の機会を作り直さなければ、危険である。もう米国頼りは当

面成り立たないのである。すでにフランスが国際会議イニシアチブをとり、1月15日、外相級の70数ヵ国をパリに招いて、二国共存の和平会議の進展を求めようとしてきた。PFLPらパレスチナ左派勢力は米仲介の延長の仏イニシアチブを批判しており、ロシアイニシアチブに期待を示している。ソ連時代の支援に及ぶべくもないが、ロシアの「公正」さに、左派勢力は期待せざるを得ないのだろう。

トランプ、ネタニヤフらカルテットに抗し、PLO・パレスチナ政府による統一した反占領闘争、BDSと連なる国際連帯、そして、イスラエル人の反ネタニヤフ民主化闘争と結びつく中で、「二国家解決」の戦略的変革を問われている。その一歩はPLO指導部自身の変革的統一こそ武器となろう。

（脱稿1月31日）

参考文献資料

朝日新聞 1月24日 オリバー・ストーン インタビュー
フォーリンアフェアーズ 2016年 NO. 7
JSR メルマガ

後記

今回の「独居寄り」の1月22日の誌は、トランプ大統領の就任演説への重信さんの感想ですが、その中に出てくる「ポスト・トゥルース」という言葉になじみがなかったので、ネットで調べてみたら、簡単には以下のようなことが分かりました。

「ポスト・トゥルース」は「POST TRUTH」で、この「POST」は「重要でない」を意味し、総じて「真実を重視しない」という意味でした。世界最大の英語辞典オックスフォード英語辞典は、2016年11月に、2016年を象徴する「今年の単語」にこの「POST TRUTH」を選んだそうで、「世論形成において、客観的事実が、感情や個人的信念に訴えるものより影響力を持たない状況」と説明しています。同辞典によると、英国のEU離脱や米大統領選を報じたり論評したりしたメディアやブログの中で多用され、使われた頻度は今年の20倍以上で、「ポスト・トゥルースの政治」という組み合わせでよく使われたのだそうです。同辞典は「情報源としてのソーシャルメディアの台頭と、エスタブリッシュメント（既得権層）が示す事実への不信の増大が概念の土台になっている」と分析しています。

そういうことかもしれませんが、多種多様のメディアが氾濫し、真実を見つめないでも簡単に自分の信念を公に流せたり、受け取れたりする情報過多の社会の中で、ふとした妄想や夢やイメージがなんらかのチャンスをつかんで、モンスターに育っていつてしまうように思えます。イメージで、不安定で、落ち着かない社会になりやすくなったのでしょうか？ 反語でしかありませんが、時間がかかっても社会を形作っている人々の真実を見出さず視野を持って、しっかりと見つめてゆくことが、何よりも重要ではないかと思えます。（Y）

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

